

新型コロナウイルスについて感じていること（蓮如上人の御文を通じて）

蓮如上人七十八歳の御文に「疫癘の御文」（裏面）があります。延徳四年六月のもの（一四九二年・室町時代）で、門弟の法敬坊順誓にあてられた手紙です。疫癘とは疫病のことです。手紙の内容には、夏の流行病（はやりやまい）で多くの人々が死亡したようであると述べられております。この時代は疫病が何か分ならず、「うつる」ということを忌み嫌っていたようです。当時の人々には、疫病が流行すると、日時の良し悪しや吉凶、霊魂によるたたりであると、原因を求めた方がいたので。そのようなことから、疫病を理由に、延徳四年を明応元年に切り替えました。世の中が混乱する大変な状況であって、暗い世情を脱却するために、「明」の字を使用されたといえます。逆に言えば、年号そのものに原因があるかのように思えません。

このたびの「新型コロナウイルス」の感染拡大について、私たちは「中国のせいだ」、「このような状況にも関わらず旅行など行ったせいだ」、「私の住んでいる所には感染がなかったのに〇〇のせいだ」と、自分ではなく、害を運んできた、外に災いがあると思っではないでしょうか。感染した人に対しては、怖れや憎しみや偏見を持ち、その家族をも遠ざけてしまいます。もちろん、感染防止のための対応（三密を避けたり手洗いなど）は必要ですが、誰もが抱えている自分の心の奥底の闇というものを見ずに、あたかも私は正しい・当たり前としてはいませんか。今回のことに限らず、部落差別・ハンセン病・障害者差別などの人権問題、そして社会的な罪など、私たちの思いは第三者であることが多く、無関心であり、無自覚的に被害者として言動していることもあるのです。つまり、自分が差別し、加害者になるかも知れないとは思ってはいないのです。

さて、蓮如上人は、このような疫病に対する死の不安に怯えている民衆に対して、「驚くべきことありません」と言われ、「生まれるときから定まっている業の報いなので」と言われています。疫病の死は縁であって因ではない、因は生そのものであるということ。運命論ではありません。縁次第で、交通事故にもなるし、病気にもかかるでしょう。分かりやすく言えば、この世に生をうけたということそのことが、死すべき因であり、人はいつか必ず死すべき定めを負って生まれてくると言われているのです。そう言われても、私たちは領けなすよね。蓮如上人はさらに、「こんなときに亡くなれば、やはり伝染病のせいで亡くなったと誰もが思うことは、もつともなことだ」と続けられています。

疫癘の御文はもちろん、これで終わりではありません。内容が飛躍する説明かも知れませんが、自分ではない外に原因を求めめるのではなく、「私が救われることが必要です」と言われるのです。救われるためには、「南無阿弥陀仏」なのです。「南無阿弥陀仏」は呪文ではありません。かと言って、「南無阿弥陀仏」と念仏をして、だんだん救われる身になるのではありません。阿弥陀如来の「あなたを救うぞ」という呼びかけに対して、誰かのためではなく、私自身を「救ってくださいる」ことを有難いと感じていくこと、これが「南無阿弥陀仏」という感謝の念仏なのです。いつでも・誰でも・どんな時でも救うということ、私たちが疑いなく信じて念仏申すこと、つまり「南無阿弥陀仏」と念ずること自体が救いなのです。

「新型コロナウイルス」がいつ収束するのかさえ分からない現状では、それぞれの不安が消えることはありません。しかしながら、生きること自体を行き詰ったマイナスだけで捉えるのではなく、自分の人生を振り返る機会とすることができればと存じます。先達からいただいた「生」の意義をお内仏の前でお念仏を申して確かめていきましよう。

当たり前前のつむぎなすい、つむぎもありません。そんな気持ちで過せばどう…になりますか？

「今日が私の一日ならいつとも変わらぬ一日は 特別な一日」

疫癘の御文 【四帖目 第九通】

(原文)

当時このごろ、ことのほかに疫癘えきれいとてひと死去す。これさらに疫癘によりてはじめて死するにはあらず。生まれはじめしよりしてさだまれる定業(じょうごう)なり。さのみふかくおどろくまじきことなり。しかれども、いまの時分(じぶん)にあたりて死去するときは、さもありぬべきようにみなひとおもえり。これまことに道理ぞかし。このゆえに、阿弥陀如来のおおせられけるようは、「末代の凡夫、罪業(ざいごう)のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべし」とおおせられたり。かかる時はいよいよ阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、極樂に往生すべしとおもいとりて、一向一心に弥陀をとるときことと、うたがうところつゆちりほどもつまじきことなり。かくのごとくころえのうえには、ねてもさめても、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏ともうすは、かようにやすくたすけます。御ありがたさ、御うれしさを、もうす御礼のころなり。これをすなわち仏恩報謝の念仏ともうすなり。あなかしこ、あなかしこ。

延徳四年六月 日

(現代語訳) 「蓮如 五帖御文」(法蔵館)より)

近頃、たいそう多くの人が伝染病にかかって亡くなっております。これは決して、伝染病によって始めて死ぬのではなく、生まれたときから定まっている業ごうの報ひびいなのです。さほど深く驚くべきことではありません。そうではありますが、今の時分にあたって死去しますと、きつと伝染病によって死んだに違いないというように人はみな思うもので、これももつともなことでありましょう。このように、業の報いによって死んでいかねばならない罪深いわたくしたちであればこそ、阿弥陀如来は、「末代まつだいに生きる凡夫ぼんぶの罪業ざいごうがどれほど深くとも、われを一心にたのみとする衆生を必ず救おう」と仰おほせられたのです。このような弥陀の勅命があるからには、いよいよ阿弥陀仏を深くおたのみ申し上げて、極樂に往生するに違いないと思いを定め、一向一心に弥陀を尊び、疑うところをわずかとも持つてはなりません。以上のように心得たうえには、寝てもさめても南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏申すのは、このようにわたくしたちをたやすくおたすけくださる御おんありがたさ、御おんうれしさを申し上げる御礼おれいのころなのです。これをすなわち仏恩報謝ぶつとんほうしゃの念仏というのです。あなかしこ、あなかしこ。

延徳四年六月 日

(一四九二年六月)